

金時計

泉鏡花

青空文庫

上

廣告

一 拙者昨夕散歩の際此^{この}辺一町以内の草の中に金時計一個遺失致し候間御拾取の上御届け下され候御^{おんかた}方へは御礼として金百円呈上可^{つかまつるべくそろ}仕候

月 日

あ ー

さー、へいげん

これ相州西鎌倉長谷村^{はせ}の片^{かたほとり}辺に壯麗なる西洋館の門前に、

今朝より建てたる広告標なり。時は三^{さんぶく}伏盛夏の候、聚^{あつま}り読む者堵^と

のごとし。

へいげんというは東京……学校の御雇講師にて、富豪をもつて聞ゆる——西洋人なるが、毎年この別荘に暑を避くるを常とせり。

館内には横浜風を粧う日本の美婦人あり。蓋し神州の臣民にして情を醜虜に鬻ぐもの、俗に洋妾と称うるはこれなり。道を行くに愧る色無く、人に遭えば、傲然として意気頗る昂る。昨夕へいげんと両々手を携えて門前を逍遙し、家に帰りて後、始めて秘蔵せし瑞西製の金時計を遺失せしを識りぬ。警察に訴えて搜索を請わんか、可はすなわち可なり。しかれども懸賞して細民を賑わすにしかずと、一片の慈悲心に因りて事ここに及べ

るなり、と飯炊めしたきに雇われたる束髪むかの老婦人、人に向いて喋々その顛末てんまつを説けり。

渠かれは曰く、「だから西洋人は難有ありがたいよ。」

懸賞金百円の沙汰即日四方に喧伝けんでんして、土地の男女老若を問わず、我先にこの財たからを獲えんと競たい起ち、手に手に鎌を取りて、へいげん門外の雑草を刈り始めぬ。

まことや金一百円、一銭銅貨一万枚は、これ等の細民が三四年間粒々辛苦の所得なるを、万一咄嗟とっさにこの大金を獲ば、蓋けだし異数の僥倖ぎょうこうにして、坐して半生を暮し得べし。誰か手を懐なごにして傍観せんや。

翌日はとみに十人を加え、その翌日、またその翌日、次第に人

を増して、遂に百をもつて数うるに到れり。渠等が炎熱を冒して、流汗面に被り、氣息奄々として労役せる頃、高樓の窓半ば開きて、へいげん帷を掲げて白皙の面を露し、微笑を含みて見物せり。

かくて日を重ねて、一町四方の雜草は悉く刈り尽し、赤土露出すれども、金時計は影もあらず。

草刈等はなお倦まず、怠らず、撓まず、ここかしこと索れども、金属は釘の折、鉄葉の片もあらざりき。

一家を挙げ、親族を尽し、腰弁当を提げて、早朝より晩夜まで、幾日間炎天に脳汁を煮られて、徒汗を掻きたる輩は、血眼になりぬ。失望してほとんど狂せんとせり。

されど毫も疑わざりき。渠等はへいげん君の富かつ貴きを信ずればなり。

渠等が労役の最後の日、天油然と驟雨を下して、万石の汗血を洗い去りぬ。蒸し暑き雑草地を払いて雨ようやく晴れたり。土は一種の掬すべき香を吐きて、緑葉の雫滴々、海風日没を吹きて涼気秋のごとし。

へいげんこの夕また愛妾を携えて門前に出でぬ。出でて快げに新開地を歩み行けば、松の木蔭に雨宿りして、唯濡れに濡れたる一個の貧翁あり。

多くの草刈夥間は驟雨に狼狽して、蟻のごとく走り去りしに、渠一人老体の疲労劇しく、足蹠踉いて避け得ざりしなり。竜動

の月と日本のあだ花と、相並びて我^{わが}面前^{まへ}に来^{きた}れるを見て、老夫は
慌^{あわ}しく跪^{ざまず}き、

「御時計は、はあ、どこにもござりましねえ。」

幾多^{かんなん}の艱難^{いざな}の無功^{むこう}に属^{ぞく}したるを追想^{おぼ}して、老夫^{らうふ}は漫^{そぞろ}に涙^{なみだ}ぐみぬ。

美人^{びじん}は流眄^{しりめ}にかけて、

「ほんとに御苦勞^{ごくろう}だったねえ。」と冷^{ひや}かに笑^{わら}う。

へいげんは哄^{こう}然大笑^{ぜんぜん}して、

「日本人^{にっぽんじん}の馬鹿^{ばか}！」

と謂^いい棄^すてつ、おもむろに歩^あを移^{うつ}して浜^{はま}辺^べに到^{いた}れば、一^{いっ}碧^ぺ千^き
里^り烟^{えん}帆^{ぼん}山^{さん}に映^{うつ}じて縹^{ひょう}渺^{びょう}画^がのごとし。

へいげん美人の肩を拊ちて、

「人間は馬鹿な国だが、景色の好いのは不思議さ。」

と英語をもつて囁きたり。

洋妾はへいげんの腕に縋りつつ、

「旦那もう帰ろうじやございませんか。薄暗くなりましたから。」

「うむ、そろそろ帰ろうか。あの門外の鬱陶しい草には弱つた

が、今ではさっぱりして好い心持だ。」

「ですけども、あの人足輩はどんな気持でしょうね。」

「やっぱり時計が見着からないのだと想つて、落胆しているだ

ろうさ。」

「貴下はほんとに智者でいらつしやるよ。百人足らずの人足を、

無錢ただで役つかつてき。」

「腰弁当でやつて来るには感心したよ。」

「ほんとにねえ。あのまあ蛇のいそうな草原を綺麗むしに撈むしらして、高見で見物なんざ太閤様も跣足はだしですよ。」

「そうかの。いや、そうあろう。実は自分ながら感心した。」

と揚々として頤あごひげ髯あごひげ搔かい撫なずれば、美人はひたすら媚こびを献こじ、
「ねえ貴下わたくし、私はなんの因果で弱けち小ちな土地とこに生れたんでしよう。

もうもうほんとに愛想が尽きたんですよ。」

へいげんうなずは頷うなずきて、

「そうありがたい事だ。こういつちや卿おまえの前だが、実に日本ジャパニイ人は馬鹿ばかさな。しかしあんまり不便ふびんだ。せめて一件の金時計を蔭かげなが

ら拝ましてやろうか。」

と衣兜かくしを探りて、金光燦爛さんらんたる時計を出だし、恭うやうやしく隻手かたてに捧はるかげて遙はるかに新開地に向い、陋いやしみ嘲あざけるごとき音調にて、

「そらこれだ、これだ。」

途端に絶叫の声あり、

「あれえ！」

と見れば美人は仰のけざま様に転まろび、緑髪は砂に塗まみれて白かかとき踵かかとは天に朝いたせり。

太いたく喫驚いたせるへいげんは更に驚いたきぬ、手中の金時計はすでに亡なし。

中

「おい大助。」

卒然従者を顧みて立たちとど住まれる少年は、へいげん等を去ること数十歩ばかり後うしろの方にありて、浪打際を散歩せるなり。父は小坪さいもんに柴門を閉じ、城市の喧塵けんじんを避けて、多しばらく日浩然の氣を養う何なにがし某とかやいえる子爵なり。その児こ三郎年とし紀十七、才名同族をきりんじ壓して、後來多望の麟兒なり。

随したがうわかもの壯わかもの佼は南海の健兒栗山大助。

「若様何でございます。」

「我おれが謂いつた通り、金時計は虚言うそだ。」

その声すでに怒いかりを帯びたり。

「どうしてお解りになりました。」

「今二人で饒舌しやべつてたろう。」

わたくし

「私には解りませんが、しきりに饒舌しやべつておりましたな。」

「うむ、解るまいと思つて人の聞くのも憚はばからず、英語ですつか

り白状した。つまり百円を餌えはにして皆を釣みなつたのだ。遺失おとしたもな

いものだ、時計は現在持つている。汝おまえも我おれの謂うことを肯きかんで

草刈をやるものなら、やつぱり日本ジャパニス人の馬鹿になるのだ。」

血氣ぼつぼつ勃々たる大助は、かくと聞くより扼腕やくわんして突立つたつ時、

擦違すりごう者あり、横合よりはたと少年に抵触つきあたる。啊呀あなやという間に

遁にげて一間ばかり隔りぬ。

「すり 掏摸だ！」

三郎が声と共に大助は身を躍らして、むずと曲者のえりがみ 頸髪執つて曳ひきたお 僵し、微塵みじんになれと頭上を乱打す。

てあら「手暴くするな。」

と少年は大助を制して、更に極めて温和なる調子にて、

「おい盗とつたろう。」

掏摸は陳じ得ず、低頭して罪を謝し、抜取りたる懐中物を恐る恐る捧うづくげて踞まりつ、

「どうぞお見逃しを願います。」

少年は打笑いつつ、

「何、突出しやせん。きさま 汝はなかなか熟練なれたものだ。」

「飛んだことをおつしやいます。」

「いやその手うでまゑ腕を見込んで、ちつと依頼たのみがあるのだ。」

大助は愕がくぜん然として若様の面おもてみまもを瞻りぬ。

「この懐中物かみいれもやろう。もつと欲ほしくばもつと遣ろう。依嘱たのみという

のは、そらあすこへ行く、あの、な、」

とへいげんゆびさを指して、

「彼奴あいつの持つている時計を掏すつてくれんか。」

その意を得ざる掏摸は、ただへいへいと応こたうるのみ。

大助は驚きて、

「ええ、若様滅相な。」

「いや少し了りようけん簡があるのだ。」

拘摸は事も無げに頷うなずきて、

「じゃあの金時計ですね。」

「汝知ってるのか。」

「そりやちゃんと睨にらんであります。あんな品は盗っても、売るのに六ヶしいから見逃みがして置くものの、盗ろうと思やお茶の子でさあ。」

「いや太ふてふて々しい野郎だなあ。」

と大助は呆然たり。

「汝も聞いたろう、あの長谷の草刈騒動さわぎを。」

「知ってる段ですか。」

三郎は告ぐるに実をもつてすれば、

「へえあの毛唐が！」

と掏摸だになお憤慨の色を表わせり。

「若様此奴は離すと、直に逃げてしましますよ。」

「こう、情無いことを謂いなさんな。私やこんなものでもね、日

本が大の鬣尻さ。何の赤髯、糞でも喰えだ。ええその金時計は

直に強奪って持って来やす。」

かかりし後、へいげんはその簪の花を汚され、あまつさえ掌中

の珠を奪われたるなり。

下

三郎は掏摸の奪いたりし金時計を懐にしつ、健児大助を従えて、その夕月下にへいげんの門を敲きぬ。

誰何せる門衛に、我は小坪の某なり、約束の時計を得たれば、

あえて主公に呈らせんと来意を告げ、応接室に入るに際して、執事は大助を見て三郎に向い、

「時計を御拾得の方は貴下ですな。この方は何用でいらつしやいました。」

三郎いまだ答えざるに、大助は破鐘声を揚げて、

「俺あ下男だ。若様の随伴をして来たのだ。」

「そんなら供待でお控えなさい。」

と叱すごとく窘めたり。大助は団栗眼を睜きて、

「汝達てめえの指図は承けねえ。さあ若様御一所に入りましょう。」

執事はこれを遮りて、

「いいえなりません。応接室へは、用事のある客の外は、一切他人を入れませんのが、当家の家風でございます。」

へいげんは金時計を失いて、たちまち散策の興覚め、すごすご家いえに帰かえりて、燈下に愛妾と額あつを鳩あつめつつ、その失策を悔い且つ悲しみ、怏おう々おうとして楽たのまざりし。しかるに突然珍客ありて、告ぐるに金時計を還さん事をもつてせり。へいげんは怏然しゆうび愁眉を開きしが、省みれば衷うちに疚やましきところ無きにあらず。もし彼にして懸賞金百円を請求せんか。我にあらかじめ約あれば駟しも及ばず、今はたこれをいかんせむ。

身を一室に潜めて、まずその来客を窺えば、料らざりき紅顔の可憐児、二十歳はたちに満たざる美少ならんとは。這奴しや、小冠者こかんじや何程の事あらん。さはあれ従者に勇士の相あり。手足皆鉄、腕力想うべしと、へいげん漫そぞろに舌を捲まき、すなわち執事をして大助を遠ざけしめむとしたるなり。

大助は敵の我を忌むを識しりて、小主公わかだんなの安否こころもと心許なく、なお推返おしかえして言わんとするを、三郎は遮りて、

「宜よろしい彼室あつちで待つてな。」

「だつて若様。」

「可いいいよ。」

と眼もて語れば、大助は強うるを得ず、

「ええ、どこで待つのだ。案内しろ。」

「静しずかにせんか、何という物言いだ。」

と三郎は警いましめぬ。

執事は大助を彼方あなたの一室ひとまへ案内し、はたと閉ざして立去りける跡に、大助は多しばらく時無事に苦くるみつ、どうどうとしこを踏みて四壁を動かし、獅子のごとき力声を発いだして、満腔の鋭気を洩もらしながら、なお徒然に堪えざりけり。

応接室にては三郎へいげんと卓テエブル子を隔てて相對し、談判今や正たけなわに闌らなり。洋ラシヤメン妾かたえも傍かたえに侍したり。渠かれは得々としてへいげんの英語を通弁す。

この時三郎を軽んずるごとく、

「一体貴下は何御用でお出でなすつたのです。拾った物なら素直に返して、さつさとお帰りなすつたら可いじやございませんか。」

「お黙んなさい。時計と交換ひきかえにお礼の百円を戴きに來ました。」

「品物を拾つて、それを返すのに札金を与れと、そちらからおつしやる法はございますまい。」

「いえ、普通ただ拾つて徳義上御返し申すのなら、下さるたつて戴きません。しかし今度のは——こう謂つちや陋さもしい様ですが——札金が欲しさに働きましたので、表おもてむき面はともかく、謂わば貴下に雇われたも同おなじでございます。それに承れば、何か貧乏人を賑にぎわすという様な、難ありがた有い思おぼしめし召まから出た事だと申しますが。」

と弁舌流るるごとく、滔とうとう々として論じ來るに、へいげん等は

こは案外とおもえる様さまにて、

「それじや御持参の時計を拝見いたしましたでしょう。」

「これです。」と懐より時計を出だして指さし示しめせば、

「どれどれ。」と取らんとするをさはさせず、三郎は莞爾かんじとして、

「違ちがえば他ほかに遺失おとしぬし人を探します。貴下あなたのなら百円下さいまし。」

彼方あなたもさる者きへん詭弁ぎべんを構えて、

「あれとは違ちがいますが、やっぱり私わたくしの時計で、それは先刻さつき掏摸すすりに

盗とられた品だが。怪あやしからん、どこでお拾ひろいなすった。」と暴あらら

かに詰なれば、三郎少しも騒さわがず、

「そんなら掏摸すすりが遺失おとしたのでしよう。何しろ私は御門外の一町以

内で拾ひろつて来きました。」

へいげんは大喝して、

「小僧、汝は搦摸だ。」

「そういう者が騙拐だ。」

「何を。」と眼を瞋して、はたと卓子を打てば、三郎は自若と

して、

「ちと仔細があつて、貴下が人は知るまいと思つている事を、私はよく知つております。文明国の御方にも似合わない、名誉ということを御存じがありませんか。私はむしろ貴下の御為を思つて計らうのですが、どうぞでございます。」

と朱唇大に気焰を吐けば、秘密のすでに露れたるに心着きて、一身の信用地に委せむことを恐るれども、守銭奴は意を決するあ

たわず。辞窮して、

「蒸暑い晩だ。」

とへいげんは窓に立寄りて海を望み、たちまち愕然として退りぬ。

「へいげん殺せッ。」

と叫ぶものあり。続いて起る呐喊の声。

月は中天にありて一条の金蛇波上に馳する処、ただ見る十数艘の漁船あり。箒を焚き、舷を鳴して、眼下近く漕ぎ寄せたり。

こはこの風説早くも聞えて、赤髯奴の譎計に憤激せる草刈夥間が、三郎の吉左右を待つ間、示威運動を行うなり。大助これを見て地踏を踏みて狂喜し、欄干に片足懸けて半身を乗出だしつ。

「も一番やれ！」

と大音声に呼ばわれれば、舟なる壮佼わかもの声を揃えて、

「へいげん殺せ。」と絶叫す。

ラシャメン

洋妾は耳を蔽おほいて卓子に俯し、へいげんは椅子に凭よりて戦おのの

きぬ。

三郎は欣然きんぜんとして、

ジャパニース

「日本人の馬鹿が、誑だまされた口惜くやしさに貴方を殺すという騒動さわぎで

す。はッはッ馬鹿な奴等だ。」

へいげんは色を失して、

わたくし

「私、何を欺あざむきました。」

「浜で御自分がおつしやった言ことをお忘れですか。」

へいげんはあるいは呆れ、あるいは愕おどろき、瞬またたきもせで三郎の顔を
 瞻みまもりたりしが、やや有りて首こうべを低たれて、

「決して欺きません、証拠しやうこがございまする。」

顔がんしよく色 土のごとく恐怖せる洋ラシヤメン妾めかけを励むまして、直ちちに齎もちら

しめたる金貨百円を、三郎の前に差さ出しだせば、三郎は員かずを検けんして
 これを納め、時計を返附して応接室を立出で、待構まちえたる従者じゆうを
 呼よべば、声に応じて大助猛然あらわと顛たふれたり。

三郎は笑えましげに、

「これをみんなに分けてやれ。」

大助は金貨を捧たげて、高く示威運動艦隊に示しつつ、

「衆みん見なろ、髯ひげから取とつたこの百円を、若様が大勢に分けてやると

おっしやる。」

その声いまだ訖おわらざるに、どつと興る歓呼の声は天に轟とどろき、狂喜の舞は浪を揚げて、船も覆かえらむずばかりなりし。

明治二十六年（一八九三）六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年8月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第一卷」岩波書店

1942（昭和17）年7月30日第1刷発行

初出：「侠黒兒」少年文學、博文館

1893（明治26）年6月28日

※初出は尾崎紅葉「侠黒兒」の附録です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：清角克由

2014年8月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金時計

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>